

4. 東照宮祭(名古屋祭)

4月16日試楽祭、翌17日本楽祭、名古屋祭とは当祭礼を挿す。

徳川家康の三回忌の元和4年に祭礼が始まった。

翌5年に東照宮が完成し、七間町が大八車を二輛組み合せ西行桜の能人形を飾った山車が登場した。

翌元和6年(1620)に数町の警固を従え神輿渡御が始まった。

七間町は弁慶と牛若丸が五条橋で大立ち回りを演じる橋弁慶車を新造し行列に加わった。

これに刺激を受けた各町が山車・練り物を造り出し、元禄・宝永のころには山車九輛と三十五ヶ町が繰り出す警固が本町通を末広町のお旅所まで練り歩く壮大な行列が完成した。

七代宗春、十代斎朝とお祭り好きの藩主の出現もあり、藩主催の大祭となった。元治2年(1865)の家康公没250年祭では総勢6、800人を超える壮大な規模で全国一の祭礼であった。

明治維新で暫く中絶したが、明治14年(1881)、義直公の神霊を東照宮に合祀した年より再興した。

盛大な祭礼も戦争の影響で昭和12年(1937)を最後に自粛し、昭和20年の戦災で山車全輛が焼失した。



■名古屋東照宮

元和5年(1619)藩祖義直公が家康公を御祭神とし
三之丸に創建する。

明治9年(1876)藩校・明倫堂跡の現地社に御遷座し
県社に昇格する。

戦災にて本殿、主要建造物を焼失したが、
昭和29年(1954)、建中寺より義直公の妻・春姫の霊廟を
移築して社殿とした。



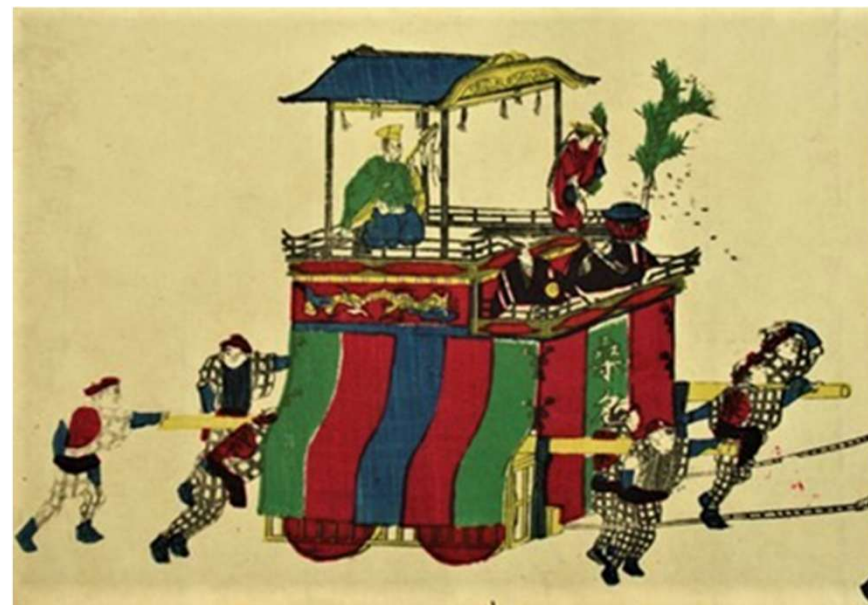
■山車 9輛

橋弁慶車、雷電車など初期の山車形態は露天の山車で
前人形は幣振りが多かった。

初めて屋根が附くのは万治元年(1658)建造の
湯取神子車と猩々車と言われる。

その後、宝永年間(1704-1711)に「名古屋型」が形成された。
その形態は四輪外輪で輪架けがつき、その上には楫棒が平
行につく。唐破風の屋根を細い四本柱で支え、その上山には
はからくり人形が乗る。前棚には采振り人形が乗る。

昭和20年(1945)の太平洋戦争で名物祭車全てが焼失した。
唯一、桑名町の湯取神子車の古車が筒井町に現存している。



■東照宮祭 山車一覽(山車・からくり人形の変遷)

町名	山車名	山車建造年	西暦	山車の形状	人形製作年	西暦	人形作者 ※京阪出身	所在 ※他所で現存
七間町	西行桜車	元和5年	1619	露天	元和5年	1619	不明(能人形)	廃車
七間町	橋弁慶車	元和6年	1620	露天	元和6年	1620	出目法眼	戦災焼失
和泉町	雷電車	慶安元年	1648	露天	慶安元年	1648	不明	戦災焼失
上長者町	鐘巻道成寺車	慶安3年	1650	露天	慶安3年	1650	不明	廃車
桑名町	湯取神子車	万治元年	1658	屋根あり	延享2年	1745	吉田治郎八	筒井町で現存
本町	猩々車	万治元年	1658	屋根あり	万治元年	1658	天下一山門山城守	戦災焼失
宮町	石引車	寛文元年	1661	露天	寛文元年	1661	不明	廃車
伝馬町	梵天王車	元禄4年	1691	屋根あり	元禄4年	1691	不明	廃車
中市場町	石橋車	宝永元年	1704	屋根あり	宝永元年	1704	吉田平次郎	戦災焼失
宮町	竹生島車	宝永4年	1707	屋根あり	宝永4年	1707	不明	廃車
京町	小鍛冶車	宝永4年	1707	名古屋型	宝永4年	1707	竹田近江	戦災焼失
上長者町	二福神車	享保17年	1732	名古屋型	享保17年	1732	吉田平次郎	戦災焼失
伝馬町	林和靖車	享保18年	1733	名古屋型	享保18年	1733	山本飛驒	戦災焼失
宮町	唐子車	宝暦6年	1756	名古屋型	宝暦6年	1756	竹田近江他	戦災焼失
桑名町	湯取神子車	天保2年	1831	名古屋型	天保2年	1831	隅田仁兵衛	戦災焼失

- ・当初は橋弁慶車を始め屋根の無い露天であり、からくり人形も簡単なものであった。
- ・万治元年に新造された湯取神子車・猩々車に屋根が付いた。
- ・1,700年代になると京町の小鍛冶車を始め「名古屋型」形成された。
- ・名古屋型が形成されると、京阪の本格的な人形師に依頼、からくり人形の仕掛けも精巧なものとなった。
 ※吉田平次郎・竹田近江・山本飛驒
- ・東照宮祭の山車は名古屋城内で尾張藩主の御上覧を仰いだ(2年に一度:お国入りの年)
 ※せり上げ車:本町御門を潜る為に屋根を上げ下げする様に造られた滑車

■東照宮祭のお囃子

名古屋の山車は城内で藩主の上覧を仰ぐ為、からくり人形の所作は能や狂言から取材したものが多く、お囃子も能楽を原曲としているものが多い。お囃子には道行囃子・人形囃子・帰り囃子がある。道行囃子の中でも、「車切」「狂言神楽」「神楽」などが能楽を原曲としている。人形囃子にも能楽が囃子の構成に採用されている。

文政5年 森高雅筆名古屋東照宮祭礼図巻(徳川美術館所蔵)

祭車名	建造年	囃子方構成				特出点 (伊勢門水著名古屋祭より引用)
		大太鼓	付太鼓	鼓	笛	
橋弁慶車	1620	1	2挺	—	4管	囃子は草笛に太鼓のみで「大波小波」と称し、道行・帰り「雨降り囃子」の2曲のみで人形囃子は無い
雷電車	1648	1	—	—	—	囃子は無い(大太鼓のみ)
湯取神子車	1658	1	2挺	—	4管	囃子は草笛に太鼓のみ
猩々車	1658	1	2挺	—	7管	囃子は道行に限り能楽「猩々乱」の手組を崩して用い、男猩々が酒を呑む時の囃子は石橋の笛で(これを「クモ」という)、また女猩々が動く時は特に「下り端」に変更する
石橋車	1704	1	2挺	—	6-7管	創立の時、「新車」(宝永歌)という曲を作り、同時に「文殊経」という極めて難しい手のついた囃子が出来た
小鍛冶車	1707	1	2挺	6	8管	囃子は歌神楽を用いている
二福神車	1732	1	2挺	4	5管	道行に限り草笛で、「浪の音」という囃子があり、その他は能管で出端・神楽・早笛を用いている
林和靖車	1733	1	2挺	3	2管	
唐子車	1756	1	2挺	5	5管	囃子は下り端を用い、唐子の動く時は「三番叟 揉の段」の様な囃子をする

◇当初のお囃子は太鼓(大太鼓)・付け太鼓・鼓・笛(能管)で構成される。

◇橋弁慶車の帰り囃子「七間町」は名曲で、熱田神楽や各地の祭礼に伝わっている。

◇能楽は太鼓(大太鼓)・付け太鼓・鼓・笛(能管)で構成される。

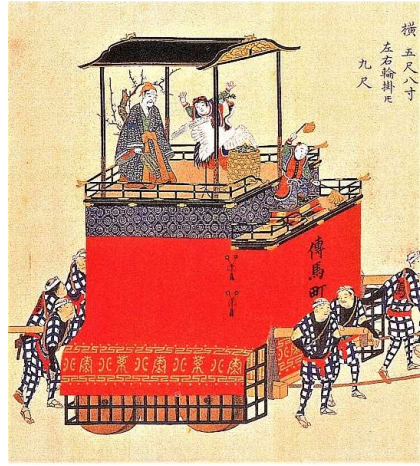
◇宝永4年(1707)、最後(9輛目)に建造された京町の小鍛冶車に名工竹田近江作のからくり人形が載せられた。これは、能楽から取材したものである。鼓を加え本格的な能楽のお囃子となった。

これより、能楽のお囃子が中心となった。

■東照宮祭 山車9輛 文化8年頃(開府2百年)写し ※全車戦災焼失 名古屋東照宮祭礼図巻 文政5年 森高雅筆



七間町 橋弁慶車



伝馬町 林和靖車



和泉町 雷電車



上長者町 二福神車



桑名町 湯取神子車



宮町 唐子車



京町 小鍛冶車



中市場町 石橋車



本町 猩々車

下七間町 橋弁慶車

元和6年作(1620)

- 元和5年(1619)西行桜の車に替る
- 元和6年(1620)橋弁慶車に替る
- 寛永7年(1630)本格的な祭車となる

上段に五條橋を架け弁慶は鎧を着け坊主天窓に鉢巻して七つ道具を背負い大長刀を持つ牛若丸は太刀を抜いて欄干の上に立ちキリキリキリと舞ながら弁慶と戦いをする
磨振りは烏帽子素袍で舌を出し大きな幣を振る

◆大幕
花色羅紗の無地幕

◆水引幕
三ッ葉葵の御紋付



伝馬町 林和靖車

享保18年作(1733)

- 元禄4年(1691)梵天王車に替る
- 享保18年(1733)林和靖車に替る

京都細工人山本飛騨大掾の作
林和靖と唐子一人を据え、前に丹頂の
鶴が一羽、芹を喰い羽を延ばして動く

◆大幕

青龍、白虎、玄武、朱雀の四神の図の縫い
潰しに猩々緋の額縁を取り、夫れに金糸で
桐唐草を縫いちらしたもの

◆水引幕

蜀江錦



和泉町 雷電車

慶安元年(1648)の作

・慶安元年(1648)雷電車を造る

天井を用いず、雷神の人形を馬に乗せ、彩色の雲を周囲に配する雷神の周囲に八つの太鼓を輪にして飾り、傍らに天衣を用い稲妻をかたどる雷神の身台は赤地金襴で装飾し、鬼面に赤頭を着せ太鼓の撥を両手に持つ、太鼓をドコドコと叩くにつれて雷神は雲と共にグレングレンと左右に揺れる

◆幕

紺地金襴にて立桶の今織

古代のままで水引幕を用いない

往古は、どの山車も金襴の幕であった



上長者町 二福神車

享保17年作(1732)

- 慶安3年(1650)鐘巻道成寺車を造る
- 享保17年(1732)二福神車に替る

吉田平次郎の作

蛭子が魚を釣り上げると、大黒が打出の小槌で袋を叩く、その袋が二つに割れて宝船が出て二福神が喜んで戯れる

◆大幕

猩々緋無地幕

「上長者町」の文字は山川墨湖の筆である

◆水引幕

渡辺清筆の下絵で縹色羅紗の有職波の丸の金糸縫い



桑名町 湯取神子車(二代目)

天保2年(1831)作

- ・万治元年(1658)湯取神子車に替る
- ・天保2年(1831)新造する、
古車を情妙寺前(筒井町4丁目)へ売却

白幣を持つ神職を置き、その前に忌竹を立て、注連縄を張り、下に湯立釜を据える
又一人の神子両手に笹葉を持ち神事を行ない、細かい紙切れを湯花とし四方に吹き散らす
前人形は笛吹きと太鼓打ちの構成である

◆大幕

猩々緋の無地幕

「桑名町」の文字は柳沢吾一の筆

◆水引幕

森高雅下絵の縹色のゴロフク地
(ごっごつした舶来の毛織物)に
鳩の散らし縫い



宮町 唐子車

宝暦6年作(1756)

- 寛文元年(1661)石引車を替る
- 宝永4年(1707)竹生島龍神車に替る
- 宝暦6年(1756)唐子車に替る

竹田近江等の作

三人の唐子に内、一人は中央の台上に座し、二人は左右に立って台の真木を回転させると同時に二つのゼンマイは舞いだして中央の唐子は枕木と共にせり上がり、松枝に吊してある太鼓を打つ

◆大幕

黄色唐草模様の大紋羅紗に緋ゴロフクの裏を付けたもの

◆水引幕

縹色緞子織、雲に麒麟の縫い
赤色の二重水引を造り檜扇を水引の角に付ける



京町 小鍛冶車

宝永4年作(1707)

- 宝永4年(1707)中市場町と分離して小鍛冶車に替る

竹田近江の作

三條小鍛冶宗近が御劔を打つ、前面に一人の童女が相槌を打ち、その最中に狐に変化する

◆大幕

三色の羅紗地に桐に鳳凰の金糸縫い
「京町」の文字は能画家の石黒一学の筆

◆水引幕

雲龍を色系で縫い潰し(蝦夷縫)
下絵は張月樵の筆



中市場町 石橋車

宝永元年作(1704)

•宝永元年(1704)石橋車に替る

京都吉田平次郎の作

左右に岩と牡丹の作り物を飾り、大将の
文殊大士は曲象に座して唐団扇を持つ
一人の童子と一匹の獅子が勢い戯る

明和5年(1768)竹田藤吉が修復

◆大幕

猩々緋の無地幕

「中市場」の文字は水谷訥斎の筆

◆水引幕 蜀江錦



本町 猩々車

万治元年作(1658)

・万治元年(1658)猩々車に替る

二人の猩々の前に大瓶を据え女猩々
柄杓を持ち酒を盃に汲み移して飲む
男猩々は瓶の縁に両手を掛け頭を
瓶の中に入れ逆立となり酒を飲む

◆大幕

猩々緋の無地幕

◆水引幕

紺地金襴の荒磯裂



桑名町 湯取神子車(初代)

万治元年作(1658)

- ・万治元年(1658)湯取神子車に替る
- ・天保2年(1831)車輛を新造する
古車を情妙寺前(筒井町4丁目)へ売却

冶郎八の作

白幣を持つ神職を置き、その前に忌竹を立て、注連縄を張り、下に湯立釜を据える。
一人の神子両手に笹葉を持ち神事を行ない
細かい紙切れを湯花とし四方に吹き散らす。
湯取神事の所作は出樋で行っていた。
前人形は台座に笛吹きと太鼓打ちが乗る。

◆大幕

羅紗立継(猩々緋、紺、緑の三色帯)

◆水引幕

森高雅下絵の雲龍



筒井町天王祭 湯取車

■警固

大母衣小母衣から幟差迄35箇町の警固練り物が、山車9輛と共に次第を打ってお旅所までの行列が進んだ。祭礼が始まった元和4年(1618)七間町、桑名町、西鍛冶町等少数の町より警固が出された。その後、祭礼が盛大になるにつれ、警固を出す町内も増え元禄、享保の頃には壮大な行列が完成した。元文4年(1739)に儉約の主意を以て人数を半減したが、明和、安永、天明より次第に隆盛に向い天保時代に絶頂に達した。

明治維新で暫く中絶したが、明治14年(1881)、御神事再興となり、新行列での警固が始められた。大方の警固は消滅したが、残った5~6箇町の警固と甲冑武者の志願者を供奉した。

■東照宮神幸及各町警固略図(文久3年:1863)



■名古屋東照宮例祭行粧之図 明治32年5月10日出版

